

ものがたり

マンモス都市東京のはずれ、江戸川べりに建つ大工場、関東鉄工——ドレイ工場と労働者は呼んだ——に働く労働者たち。主人公の谷山は、竹を割ったような性格、彼は同郷の林をひきつれ、工場裏の土手に集まるアベックを脅まわっていた。

ある日、会社の新体制運動でなれないクレーンの運転にまわされた林が、谷山の眼前で墜死した。谷山は怒り狂った。林には、光子という姉がいた。悲嘆にくれる光子への谷山の同情は、いつしか愛情へと変わっていった。

工場には組合がなかったが、低賃金と劣悪な労働条件の中で、いま、組合づくりがひそかにすすめられていた。この空気を察知した会社は、対抗策として第二組合を用意していった。大村は、鍛えられた頼もしい金属労働者だし、田口は、大学出の良心的な男で査定の仕事をしていた。

塚本は、目先がきき、弁舌さわやかだった。彼の主張が支持され、林の死を契機として組合が公然化した。だが、この塚本こそ会社側のスパイだった。誕生したばかりの組合をまちうけていたものは、会社の「首切り」であり、暴力団のテロであり、警察隊の弾圧であった。

しかし、相次ぐ弾圧は、彼等を鍛え、行商に、オルグにと闘いは前進した。一方、第二組合でも合理化への不満は増大していった……。

「ハケン(仮題)～原作 時の行路から」映画化実現へ！

「ドレイ工場」から50年。いま、労働者の置かれている状況は？非正規が4割を越えるなか、「人間らしい働き方」とはを考える映画「ハケン(仮題)」製作実現へ！

映画「ドレイ工場」 完成50周年記念上映にあたって

映画「ドレイ工場」が完成して50年がたちます。

今日の社会は長時間労働とパワハラ・セクハラが横行する「ブラック企業」がひろがっています。それは50年前につくられたこの映画「ドレイ工場」に出てくる風景と重なります。

当時も、リストラと解雇が職場に吹き荒れていましたが、そこには、人間らしく生きることをのぞみ、立ち上がった若者たちがいました。それが映画のモデルとなったJMITU日本ロール支部(当時は総評全国金属日本ロール支部)のたたかいです。

この映画は、労働者・労働組合の闘いを描いた名作であり、その素晴らしさは50年の年月を経た今でも色褪せることはありません。そればかりか、労働者のたたかいと団結の大切さをリアルに描いたこの映画は、労働組合の学習教育向けの格好の資料となるでしょう。より多くの新組合員、若者に見ていただきたいと思えます。

映画「ドレイ工場」 完成50周年記念上映会実行委員会 呼びかけ人

小田川義和(全労連議長)
森田 稔(東京地評議長)
三木 稔(JMITU委員長)
川田 泰志(JMITU日本ロール支部委員長)
生熊 茂実(金属機械反合闘争委員会委員長)
藤野戸 護(共同映画株式会社代表取締役)

映画「ドレイ工場」完成50周年記念上映会

2017 **11/18** 土

四谷区民ホール

東京メトロ丸ノ内線
新宿御苑前駅 2番出口徒歩5分

【上映時間】①10:30 ②13:45 *1回目と2回目の間で主催者、出演者からの挨拶(予定)

【入場前売券】1,000円

主催・映画「ドレイ工場」完成50周年記念上映会実行委員会
事務局・JMITU(TEL03-5961-5601, doreikoujyou@gmail.com)

